

日本語言語文化における主体性の研究

—中国人学生の誤用分析を中心に—

稲村 すみ代

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of Subjectivity in Japanese Language Culture

—Common Mistakes among Chinese Students—

INAMURA Sumiyo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Japanese language speakers do not generally refer to whatever they think already understood from the context. Speakers of other languages which require specifying the subject of a sentence such as English and Chinese, however, have difficulty in understanding who is speaking to whom when they try to learn Japanese. In this thesis I will examine common mistakes that Chinese students make and try to come up with effective explanations, so that such mistakes can be avoided.

1.はじめに

「日本語言語文化における主体性の研究」において、本論では「主体」、「自他」等をキーワードとして日本語の特性について考察する。〈話し手（表出の主体）〉による表現が、聞き手に受け取られるとき、〈聞き手（表出の受容者）〉はどのような受容を行っているのか、話し手は聞き手のどのような受容を前提として発話しているのか。すなわち、日本語表現が機能する「場」が、いかなる受容を要するかを考察していくなかで、その第一歩として日本語表現の中の自動詞他動詞表現についての論述を試みたい。日本語は「発話状況・発話の場」を重視し、〈発話主体中心の視点を通じた表現〉による言語であるという点を前提として考察を進め、日本語教育現場でどのように指導教育していく必要があるのかをさぐっていく。

本論では、特に、中国人日本語学習者の誤用を考察し、日本語言語文化における日本的思考法、表現法を考察することを最終的な目的とする。新しい言語観、日本語観に基づきつつ、日本語教育現場で、学習者の理解に役立つ具体的な文法記述と解説を目標とする。

2. 中国人学生の誤用分析

2.1 研究対象学生（赴日本国留学生予備学校）

筆者は2009年3月から7月の間、中国に滞在し、日本文科省の国費留学生に選ばれた中国人の大学院修士課程修了者への日本語教育を担当した。赴任校は、中国吉林省長春市にある東北師範大学留学生教育部内に設置されている「赴日本国留学生予備学校」（以下、「予備学校」と呼ぶ）である。日本文科省と中国教育部の合同プロジェクトによって運営されている学校で、学生は中国全土の修士号取得者のなかから選ばれており、日本の大学院の医学、工学分野などでの博士号取得を目指している。

2.2 中国語との対照から日本語の主体を見る

日本語学習者にとって、何がむずかしいのか、どのような項目の習得が困難なのか、今回、筆者は「中国で、中国語を母語とする人々に日本語を教える」という仕事を通して考察する。特に、自動詞と他動詞の形態的な区別がない中国語母語話者にとって、また、語の文法上の意味・立場（主格属格与格などの格関係）が、英語と同じく語順によって示される中国語では、「我ウォー（私）」「他ター（彼）」

を文中に明示するため、「私」「彼」などの文の主体を明示することがない日本語の読みとりが困難になっている、という点に焦点をあてて、考察を進めたい。

本論は、「これまで追求が十分でなかった<主体>をめぐる日本語統語論（シンタクス）と日本的思考、日本的表現の関係をみていき、どのように説明すれば、非日本語母語話者の日本語文章理解が適切に進められるのか」という筆者の研究課題のうち、実践研究部分の一部にあたる。

3. 先行研究

これまで、日本語の文の主体については、さまざまな見地から優れた論が発表されてきた。自動詞他動詞の形態論的な論、また態（voice）の研究などによって日本語と他の言語との主体の現れ方の違いなどがあきらかにされてきた。ことに池上（1985）以後、<スル>言語の印欧語（英語など）と<ナル>言語の日本語という対比は、「主体を言い表さない日本語」の問題とからめて、日本文化論に関わって引用されることも多く、数多くの論述がなされている。

3.1 池上嘉彦

『「する」と「なる」の言語学』の核心部分をまとめた池上(1982)『表現構造の比較—<スル>的な言語と<ナル>的な言語』のなかで池上は、「日本語は<出来事全体>=<コト>中心的事態把握に基づく言語類型に属する。日本語では個体を出来事全体に埋没させた「なる」的な表現になっている。」と述べている。

3.2 森田良行

森田良行は、「発話者は、<己>であって、<内>の存在として陰在化し、己の目でとらえられる事物、現象が<外>の世界として顕在化し、文面に表れる。」と、日本語の主体について述べている。

森田（1998）は、日本語に「無主語文」が多いことを取り上げ、次のように述べている。

<主語><目的語>が省略されており、<日本

語>では、表現に際して、現在の事象である事柄や周囲の状況を、自分自身の目でとらえ心で感じた外界のこととして、聞き手にそのまま投げ掛ける。己を客体化し、対象化した表現をしない。

日本語がいちいち<私>を文の中に立てていかない言語であるということは、話し手が表現を進める<話者の目>として言葉の背後に隠れてしまい、話者は視点を通して対象と対峙している、そのような立場に立つ言語だということである。

(13)

4. 自動詞文他動詞文

4.1 これまでの研究の流れ

明治以来、日本語文法研究は、印欧語文法との対比対照を主流として進められてきた。そのため、自動詞他動詞という概念においても、印欧語の「自他」の区別を日本語にそのまま適用したところから、混乱を招く結果も引き起こされてきた。英語などで、他動詞は直接目的語（対象格）を取る動詞をさす。英語の場合、多くの動詞が自動詞と他動詞との間に形態的な違いがない。“open”を例にとるなら、“I open the window.”と“The window opens.”の動詞の形は、自動詞他動詞でかわりがない。日本語の自他の場合、「を格（対象格）」を取る動詞が他動詞、ということになるが、日本語では他動詞「私は窓を開ける」と自動詞「窓が開く」は、動詞の形が異なり、「あける」は一段活用動詞、「あく」は五段活用動詞と、活用形も違っている。多くの他動詞は、ペアになる自動詞を持っていて、この自動詞他動詞のペアを早津恵美子（1987, 1989a, 1989b）は、有対自他動詞と呼んでいる。

日本語の自動詞他動詞は、構文上の「対象格を有するか否か」ということよりも、「人的意図的な行為が発言しているのか」、「人為によらない、自然的状態や事態の表れ」なのか、という意味的な違いの研究がなされてきた。明治時代に西洋文法が日本語研究の主流になる以前、江戸時代の国学者本居春庭はこの自動詞の意味を「自ずから然る」と言い表した。本居春庭（1763-1828）の自他の学説『詞八衢（ことばのやちまた）』（1829（文化5）年刊行）

は、現代における認知科学の観点に立脚した文法研究から見ても、日本語の自動詞文他動詞文についてのすぐれた知見を示している。

近年では、池上嘉彦、森田良行らの日本語論が、自動詞文他動詞文、文の主体、文の視点などにおいて、有意義な論を示している。また、三上章も、『日本語語法序説』などに「日本語の主語は、西洋文法でいうところに主語とは異なる」という説を展開している。行為者を明示しない日本語の特質は、特に英語との比較においてさまざまな論が提出されてきた。いわゆる「日本語の主語無し文」論争である。三上章の一連の論述と、近年、三上の論を取り上げている金谷武洋(2002, 2003)の論など、論争は途絶えることなく続いてきた。金谷武洋(2002)は、三上説を援用して次のように述べている。

日本語に自動詞文があふれている最大の理由は、存在文として表現することで行為者を消すことが出来るからなのです。こうした言語を母語とする我々は、積極的行為をとろうとしません。何か問題が起きたとき、英語話者ならなんとか手を打って対処してしまう状況下で、日本語話者は多くの場合諦めてしまいます。(161)

これは、従来日本語が持つ特質として日本人論が展開してきた「日本語母語話者は、積極的人為的行動より、自然の流れにのることをよしとする→集団主義・ことなかれ主義」などに言われてきた論調と軌を一にしている。

しかし、『「する」と「なる」の言語学』以来、池上嘉彦は、言語的特質と言語外の文化特質との関わりを安易に結びつけようとする「日本人論」には慎重な論を提出している。「する」型の印欧語に対して日本語が「なる」型を多用するのは文法的な事実であったとしても、「主語を明示しない日本語」から直接に「消極的行動」、「集団主義」、「非分析的思考」、「自然中心の哲学」などを結びつけるのは、厳密に言語学を学んでいこうとする者の態度ではないと、筆者も考える。

日本語学習者が読み取りに困難を覚える「日本語文の主体」について、誤用分析の報告などからの言

及はさまざまにあるが、言語学・日本語学研究と、日本語教育実践の中で得られた知見とを重ね合わせるなかで、統一的に日本語の主体を考察していくという研究は多くはなかったと認識している。本稿では、現在の勤務校、赴日本国留学生予備学校での学生の日本語誤用を分析しながら、日本語主体の何がわかりにくく、何が読みとりを困難にしているのか、どのように指導していけば背景化されている日本語の主体>を読み取っていけるのか、という点を中心に明らかにしたい。

4.2 日本語の主語

日本語は「行為者」を明示することがない言語であると、日本語に関する多くの論の中で指摘されてきた。英語との比較では多くの例文が提示されている。

- (1) I have time. → 時間があります。
- (2) I have a daughter. → 娘がいます。
- (3) I want this car. → この車が欲しい。

英語では主格「I」が示される文も、自然な日本語ではすべて「私」は明示されず、あえて明示するならば、(1)、(2)とも、「私には時間があります」「私には娘がいます」と、「私」を場所として扱い、存在場所を示す助詞「ニ格」をつけてから主題化(トピック提示)の副助詞(係り助詞)の「ハ」をつけることになる。(3)も、「欲しい」の主体を明示するならば、トピック明示副助詞の「ハ」をつける。主格の「ガ」をつけた場合、「私が、この車が欲しいのです」などのように、「他の人ではなくて、この私」が」という対比強調の意味を持つ文になる。英語では主語を有する他動詞文が、日本語では自動詞文になっている。(ある、ない、という存在文。また、欲しいという心的状態を表現する形容詞文)

次に中国語との対照を確認しよう。(例文は日本放送協会編初級中国語学習書『ニーハオ明明』等から。表示できない簡体字は、繁体字表記した)

- (4) 今天, [尔]有几节课?
→ 今日は何時間授業があるの?

直訳：あなたは何時間授業を有しているのか？

(5) 又是面条、我不愛吃。

→ またおうどんか。たべたくないよ。

直訳：またうどんです。私は食べたくない。

(6) 晚上、給[尔]包饺子。

→ 夜はギョーザをつくってあげるよ。

直訳：夜、あなたに餃子を与えよう。

(7) 我有時間。 → 時間があります。

(8) 我有女儿。 → 娘がいます。

(9) 我想要这辆汽车 → この車が欲しい。

森田(1998)は、『日本人の発想、日本語の表現—「私」の立場がことばを決める』の中で、次のように述べているが、なぜ日本語が主語の明示をしないのか、ということを経験者日本語話者に伝えるとき、有益な論点である。

「時間です」も、文法的にそれら(筆者注：主語、目的語など)を補うことの不可能な場合である。(略)それだから、このような表現は不適格文というのではない。これで、立派に日本語として通用するし、日本人なら誰一人正しい日本語として疑わない。

話者はあくまで外の世界を眺めとらえる主体そのものであるから、意識の外にある。もし文中で「私は・・・」と主語に立てたら、「私は行きませんよ」のような、「他の人はともかく、この私は・・・」といった対比を取り立てていう意識が表にだされる。つまり、その「私」はもはや言葉を発する<己>自身ではなく、「他の人」と同列に並ぶ<素材化した対象>と化している。(略)日本語が比較的「私」の現れる率が低いといわれるのも、単に文法的に主語省略の可能な言葉だからというよりは、むしろ、自身の視点から対象把握がなされているために、己はあくまで表現者の立場で、わざわざ自身を客体化して文中の主語に立てるといった姿勢が取りにくい、そのような理由によるというほうが正しいであろう。(12-15)

5 誤用分析

5.1 他動詞文・自動詞文

これまで筆者の指導してきた中国人学生は、文法的には、動詞の自他の区別は習っているが、自動詞文は人・主語文がほとんどで、物・主語の自動詞文を使いこなすには至っていない。自動詞他動詞に形態的な区別がない中国語話者にとって、自他の区別は、発音の有声音(濁音)無声音(清音)の区別以上に難関である。また、授受動詞も、だれがだれに何をしてやっているのかという主体の省略がある場合に、誤用が多く見られる文法項目である。これまでの宿題として課した文法問題のなかから、誤用例を提出する。

①地震が(で)大勢で(の)人を(が)下敷きになってしまいました。

自動詞「なる」他動詞「する」の区別がついていないために、「下敷きになる」を他動詞と混同したため、「地震」を主語ととらえ、助詞を間違えた例。

②あと5分ぐらいすると、お湯を(が)沸きます。

どうしても、動詞の主体を「人」として考えるために、「湯が沸く」という自動詞表現でなく、「人が湯を沸かす」という他動詞表現を使おうとする傾向があり、しかも「沸く・沸かす」の自他区別がついていないため、助詞を誤用している。

③この薬を皮膚に塗っておくと、虫を(が)来ません。

これは、条件文の前件の主語が「人」であるため、後件の主語も人であると考えたための間違い。助詞を「を」にするなら、「虫を来させません」という表現が成立するが、使役文はこの時点では未習である。

④家族のためにも、早く家をたてる(たてよう)と努力していますが、なかなか建て(たてられ)ません。

「建つ・建てる」の意志形可能形の混同による誤用である。

⑤早く適当の(な)仕事を(が)みつかるといいですね。

物主語「仕事」を受ける動詞述語は「みつかる」であり、人主語になると「人が仕事をみつける」となるのだが、自他動詞が区別できていないために誤用している。「人」を主語としてたてたい中国語話者は「仕事が見つかる」という表現でなく「私（あなた）が仕事をみつける」という文のほうを好む。

⑥母は、洗濯物が干したままにしておいた（なっていた）ので、取り込みなさいと、私に言いました。

後件の述語動詞「言いました」の主語は「母」である。洗濯をしたのは母である。条件文が入れ込まれており、洗濯物を主語とする「洗濯物が干したままになっていた」と日本語母語話者は解釈するが、非日本語母語話者は、文のすべての行為者が「母」であると考え、条件文入れこみの部分が「洗濯物が」と、物主語になっていることに気づかない。そのため、「洗濯物が干したままにしておいた」という誤文になっている。

⑦ごみや油をそのまま流れれば（流せば）管が詰まってしまいます。

条件文の後件が「管が詰まる」という自動詞文であるため、前件が「ごみや油を」と、「を格」助詞が使われていることに気づかず、「人がごみや油を流す」という主体を見落としてしまう。そのため、「ゴミや油をそのまま流れる」と、自動詞を用いてしまう。「だれが」という主語を省略してある場合、省略されている主語を見つけだして的確に判断することは難しいと思われる。

⑧A：古い家具はどうしますか。

B：古い家具はリサイクルの店が（に）全部売ってしまった（しまおう）と思っています。

Aのことばから、古い家具の処分をしようとしているのはBであることがわかる。日本語学習者はそれに気づかず、家具を売るのは「リサイクル店」とあると考えたための誤用。

⑨魚の新鮮な味が（を）とどめました。

「（私たちが海鮮レストランで食べた魚は）新鮮な味をとどめていました」と、書きたかったのです

ようが、「とどめる」「とどまる」の混同によって、非文になっている。

⑩別便でCDを送りましたが、もうそちらにとどけた（とどいた）でしょうか。

この複文前件の行為主体は<わたし>なので、後件の主体も<人>である、と学習者は考える。

前件 CDを送った

後件 CDを届けた

複文の前件後件の主体は同一の場合もあるが、異なる場合もあるということに留意せず、どちらの主体も「私」と見なしてしまう。前件でスポットライトがあたっているのは、「CD」であり、行為者の「わたし」は背景化している。後件ではCDが主題化された上に、背景化され、文の表面には現れない、という学習者にとっては、たいへんわかりにくい文である。

上述の誤用例に加え、自動詞他動詞の選択において、筆者が担当日本語クラスで行った調査を報告しておきたい。筆者が教室内で利用しているステンレス製お茶ボトルを開けようと、フタを回す動作をする。「う～ん、開きませんねえ、困りました。もっと力を入れてみましょう。」力をこめてフタを回す動作。フタが開いたとき、「先生は、次にどう言うと思いますか。あ、ボトルのフタ～、、、
1) あっ、やっとボトルのふたが開いた。
2) あっ、やっとボトルのフタを開けた。
次に言うのは、どちらでしょうか。」

18人のクラスのうち、2)を選んだ学生はひとりだけであった。あとの17人は、「あ、ボトルのフタを開けた。」を選んだ。「開いた」を選んだ学生に、なぜ「開いた」を選んだのかたずねると、「先生が、自分で力を入れたから」つまり、他動詞「開けた」と自動詞「開いた」を逆に覚えていたのであって、結局全員が他動詞の「あ、開けた」を選んだことになる。かほどに、中国語母語話者にとって、「行為者の動作であることがはっきりわかっている事柄について、自動詞で表現する」ということが考えにくいことなのだということがよくわかる事例調査となった。

日本語学習者にとって理解しにくい「行為主体の人称と述語」の例をもう一件提出する。

⑩ 1時間も待たせてしまったので、先輩は(を)怒らせてしまった。

誰が怒っているのか。誰が怒り、誰が怒らせたのか。誤用した学生がどう解釈したのか、聞き取り調査をしたところ、以下の解釈がわかった。

後件に「先輩」という人を表す語が有るので、主語はこれだと判断し、前件も「先輩」が主語であると考え。先輩が私を待たせた。私は待った。そして、私は怒った。学生の解釈では「(先輩が私を)1時間も待たせてしまったので、先輩は(私を)怒らせてしまった。」となったのである。

5.2 授受動詞文

授受動詞の間違いは非常に多く、「やりもらい」は日本語教育の最難関であるということを実感している。授受動詞文も日本語の主体と客体の捉え方と表し方に関わる。特に誤用が多い「くれる」、「くださる」は、他者を文の主格に据えて、自分への方向、自分の身内の方向へ行為が向けられた場合の表現である。「王さんは、私の妹に花を買ってくれました」において、中国語は英語の give に当たる「給」を用いて「王給我的妹妹买了花」となるので、どうしても「王さんは私の妹に花を買ってあげました」となってしまう。「私は王さんに花を買ってもらいました(我王贈買花了)。」は間違いが少ないが。日本語では<話し手=発話主体>と<恩恵の受け手>の間の関係が重視され、身内であるなら、「自分と同一化している自己の延長」のなかにいる者として扱う。日本語の<発話主体>、<文の主体>、<延長された自己>などがどのように重層的に日本語らしさを成立させており、どのような表現が日本語学習者にとって理解の躓きとなるのかを、これから探っていかなければならない。

作文において、授受表現に間違いがない学生がない、というくらい誤用が多くみられた。

① 姉が病気になったとき、近所の親切な方が姉を車

で病院へ運んでいただき(ください)ました。その方にはほんとうに親切にしてくれ(いただき)ました。今、姉は元気になって退院しました。一度その方に元気な姉を見に来てください(いただきたい)と思っております。

② 陳さんが申し出てやった(くれた)ので、この仕事は陳さんに手伝ってあげる(もらう)ことになりました。この仕事は大変なので、だれかもう一人手伝ってやり(くれ)ませんか。

③ 先生、このレポートを見てさしあげ(いただき)たいのですが。

④ 友達はナイフとフォークの使い方を教えてあげ(くれ)ました

5.3 「～がる」の場合

初級後半の日本語文型として、「～がる」を導入した。感情・感覚・心的状態を表す形容詞、たとえば、「うらやましい」は、「私は日本のゴールデンウィークがうらやましい」と言えるが、「彼は日本のゴールデンウィークがうらやましい」と言うことができない。(これは、オーソドックス日本語の場合であって、日本人でも若者世代においては「したい」、「したがる」の区別が厳密ではない。)教科書の文法解説には、「私」以外の第三者を主語とする場合「彼はうらやましがると言わなければならない、と書いてある。「Aさんは、日本のゴールデンウィークをうらやましがっている」と表現するのが、オーソドックス日本語である。

日本語は、発話主体自身の感情・感覚・心的状態を示す「私はうれしい」、「私は悲しい」に対して、感情の主体が発話主体ではない場合を峻別していることになる。

森田(1998)は、この「～がる」について、以下のように述べている。

場面依存的で自今視点中心に事物を捕らえていくという発想は、言い換えれば、話者が話題とする場面へ目を向けて、自身の目に映った姿として

対象をとらえ、自己の主観として事柄を収める表現態度でもある。客観世界における第三者同士の事象を傍観的に記述すると言った態度とはほど遠い。

動詞と形容詞とを比較したとき、形容詞、特に感情や感覚を表す形容詞は、主観的で自己の立場で事態を捕らえようとする傾向があります。それゆえ話者自身のことなら「私はうれしい」「(私は)寂しい」「(私は)痛い」と形容詞の文で表すが、これが三人称を主体とした表現だったらどうなるか。恐らく「彼はうれしがっている」とか「喜んでい」「彼は寂しがっている」とか「寂しそうだ」そして「痛い」なら「あの患者はとても痛がっている」のように動詞で言い換えたり、「そうだ」をつけて事態を客体化しなければなりません。形容詞に「がるをつける」と動詞に変わり、それが結果として心理状態や感覚を表に現す第三者の行為を傍観者として叙する発想となるのです。

(19-21)

5.4 短文作りの練習文

短文作りの練習文「母の話では、幼稚園の時、私は犬を———そうです」について。後半に「こわい」の形を変えて記入し、文を完成させるという問題である。ほとんどの学生が「母の話では、幼稚園の時、私は犬をこわかったそうです」とまちがえて書いていた。「彼」、「彼女」など三人称のときは「～がる」を使い、「私」のときは形容詞をそのまま使う、と文法解説に書いてあり、そう教わったからというのが理由。

この文で「怖い」という感情の持ち主は「私」。そして、「幼稚園のとき」は過去形になるから「こわかった」と、学生は考えた。

教師から学生への解説。「こわい」など、心的状態の形容詞は、自分自身の現状について言う。その場合の助詞は「が」になる。「犬がこわい」。過去のときは「犬がこわかった」。「私は犬がこわかった」が、正しい文。しかし問題文は「犬を～」だから、「犬をこわかった」は、非文となる。問題文で「犬」を怖いと思っている主体は「母の話の中に登場した幼稚園のときの私」だから、この「思い出の

中の過去の私」は、三人称として扱う。「現在の私」が感じている感情」ではない。「こわがる」の助詞は「を」になるから、「幼稚園の頃の私は、犬を怖がった」になる。

濁点があるなしで、「こわかった」「こわがった」の主格が決まり、助詞が変わる。学生達は、「我」「[尔]」を明示する中国語文から、主格対格を明示しない日本語文がわかりにくく、「幼稚園のときの私」のように、「私」が書いてあっても、「発話主体としての私」とは異なる「私」にとまどう。

6.まとめ

初級日本語学習を終了し、「予備学校」の学生たちは中級日本語へと学習を進めている。中級になると、ますます「日本語らしい表現」が多くなっている。

『中級日本語』第5課の「さくら」という文章冒頭に「桜は日本の代表的な花である。毎年春になると日本の各地で美しい花を咲かせ、人々を楽しませる。」という文がある。学生はこの文の解釈に迷った。「桜が咲く」という自動詞文は理解できるが、使役的他動詞を使った「花を咲かせる」という文に対し、花咲じいさんのような人が意志的に「花を咲かせる」というシーンを思い浮かべたのである。「使役文は意志動詞に用いるのが原則で意志を持たない物を主語にすると「鍋がフタをかたかた言わせている」のように、擬人的な文、再帰的構文となり、日本語らしくない文である」と教わっていたからである。(一般的文法書の解説では「花を咲かせる」は使役的他動詞文であるが、稲村(1995a, 1995b)は、再帰的構文であり、日本語としてごく普通の日本語らしい表現である。翻訳調ということはないと考える。)

一文一文を母語に置き換えるのではなく、日本語らしさを理解し日本語をそのまま日本語として理解するためには、「日本語母語話者がいかに<事象>を認知把握し、言語表出に際しては、どのように表現していくのか」という点を明らかにしなければならない。これからの作業遂行の展望として、中国語と日本語の自動詞文・他動詞文の対照を行う必要もあるし、中国語で出てくる主語を日本語では言わな

いのだ、ということ初級よりもっとはっきり伝える必要もある。

たとえば、「遅れてしまってすみません」という簡単な挨拶文。遅れて教室に入ってきた学生が教師に遅刻をわびるにも、「很 对不起。我来晚了。」と表現する中国語であるから、「すみません、私は遅く来ました」と、学生は「私」を言いたがる。話者が、聞き手との間に了解ずみだと感じていることからは、出来る限り背景化して表面には出さないのが日本語であり、その際もっとも省略されやすい語が話者自身である「私」であるから、中国語のように「我」をひとつひとつの文につけているのを直訳したのでは、日本語表現としては「私」という語がわずらわしく感じられる。このように、誤用例と対照させることで、日本語文を具体的に検証し、日本語が主語を背景化し、状態の変化、事態の推移として自己の周囲の事象を表現しようとする言語であることを伝える日本語教育を実践していきたい。

森田(1995)は、前書きで次のように述べている。

受身文なら受身文、使役表現なら使役表現という具合に、それぞれ別個の言語事項として課が立てられ、教育が行われる。それでは言語現象が細切れになり有機的な結びつきはおろか、同心円上に日本語能力を拡大していく視点も、日本語の底を支える共通の思考様式もつかめないまま、ただ個別に言葉の形式的なルールを記憶していただくの無味乾燥な言語学習となってしまうであろう。(前書き x)

日々、日本語教育に携わる者は、「まさにその通り」と思う。教科書の課ごとに文型を次々に導入し、文法事項の定着をはかることに追われると「日本語の底を支える共通の思考様式もつかめないまま」すぎてしまう。筆者が日本語教育を実践するにあたって、まず心がけていきたいと思っていることのひとつが、ここで森田が言っている、別個の言語事項としての文型教育においても、授業者は常に日本語の底を支える共通の思考様式を意識しつつ、学習項目の定着をはかるということである。

現在の教育の場である予備学校においても、学習

者の積極的な授業態度によって、日本的思考と日本的感性について十分な配慮を加えつつ、日本事情として日本の言語文化や日本社会などについて伝えていく授業を目指している。

参考文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 池上嘉彦(2000)『日本語論への招待』講談社
- 池上嘉彦(2007)『日本語と日本語論』ちくま学芸文庫
- 稲村すみ代(1995a)「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報第16号』
- 稲村すみ代(1995b)「現代日本語における再帰構文」『日本語の教育と研究(窪田富男教授退官記念論文集)』(専門教育出版)
- 奥田靖雄(1984)『ことばの研究・序説』むぎ書房
- 片山きよみ(2003)「他動詞の再帰的用法について」『熊本大学言語学研究室紀要』
<http://118.let.kumamoto-u.ac.jp/ariake/05-03.pdf.html>
- 金谷武洋(2002)『日本語に主語はいらない』講談社
- 金谷武洋(2003)『日本文法の謎を解く』ちくま新書
- 佐藤琢三(2007)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書店
- 鈴木孝夫(1990)『日本語と外国語』岩波新書
- 高橋太郎(1994)『動詞の研究』むぎ書房
- 寺村秀夫(1982・1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』くろしお出版
- 橋本進吉(1946)『国語学概論』岩波書店
- 早津恵美子(1987)「対応する他動詞のある自動詞の意味的・統語的特徴」『言語学研究6号』京都大学言語学研究会
- 三上章(1953)『現代語法序説—シンタクスの試み』くろしお出版
- 三上章(1972)『続現代語法序説』くろしお出版
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 南不二男(1993)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

- 宮島達夫（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』
秀英出版
- 村木新次郎（1991b）『日本語動詞の諸相』 ひつじ
書房
- 森田良行（1990）『日本語学と日本語教育』 凡人社
- 森田良行（1998）『日本人の発想、日本語の表現』
中公新書
- 森田良行（2006）『話者の視点が作る日本語』 ひ
つじ書房
- 森田良行（1995）『日本語の視点』 創拓社
- 本居春庭（1763 - 1828）『詞通路』『詞八衢』
- 山口明穂（2004）『国語の論理』 大修館書店
- 渡辺実（1971）『国語構文論』 塙書房

(Received: May 31, 2009)

(Issued in internet Edition: July 1, 2009)